
とある竜の一生

蜻蛉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある竜の一生

【Nコード】

N0814W

【作者名】

蜻蛉

【あらすじ】

「とある竜の一生」

「銀色の獣と少女の話」

「騎士と可哀想な娘（ある国に伝わる昔話）」他。

一話完結のオムニバス。単品でも読めますが、全部の話はどこかで繋がっています。

童話風の異類恋愛譚。

一匹の竜の話しよう

夕焼けで黄昏色たそがれいろに輝く谷を抜けたところに、ある若い竜が住んでいました。

若いといっても、彼らは人からしたら永遠と呼べる永い時を生きるので、彼は人の一生をすでに三度程見ていました。

竜は孤高の生きものです。

その強さゆえに、群れを作らず。めったに他の種族と係わらず。ひっそりと、誰も近寄れないような谷間で生きるのです。永い、永い時を。

若い竜も例に漏れず、そうして生きる竜のひとりでした。

なので、すべてはちよつとした気紛れだったのです。

彼が深い眠りから三年ぶりに目を覚まし、久方ぶりに住みかから抜けて出たのも。

若い竜は鈍色にびいろに輝く羽を広げ、雪解け水に作られた湖へ降り立ちました。ここは人里からそう遠くはありませんが、人は滅多に来ません。

その湖は竜がときおり訪れるので、人々には畏れおそられていたのです。静かで美しいそこは彼のお気に入り場所でした。

竜は優美な動作で翼を折り畳み、静かに湖の端へ身体を預けました。

しばらく翼を休めていると、不意になにかの気配が湖へ近づいてきました。

竜は気配を探り、眉を寄せました。あれは人です。

見つかったら面倒なことになりそうです。眉を寄せたままの格好で竜は小さく唸りました。

その声に弾かれたように、近くで休んでいた小鳥や動物は一斉に逃げ出します。

彼らには悪いことをしましたが、これで人間も近づいてこないでしょう。竜はまどろみに身をまかせ、瞳を閉じました。

次に瞳を開けたとき、竜はあまりの驚きに叫びだしたくなる口を閉じました。

竜から少し距離をおいた場所に 人間の、それも十五ぐらいの女が、座り込んで本を読んでいたのです。

竜はじつと片目を開けて女を警戒していましたが、彼女は竜に危害を加えることもなく、ただひたすら分厚い本を読んでいた。

場にページをめくる音と、戻ってきた小鳥のさえずりだけが響いています。

女は空がオレンジ色に染まる頃、ゆっくり帰って行きました。

竜の姿を見て、悲鳴をあげない人間は初めてでした。

次の日も女は湖にやってきました。

その次の日も、また次の日も。そうして竜の隣に座って、編み物をしたり、本を読んだり。なんと竜にもたれかかり眠ることもありました。

この孤高の王に、この世界で一番恐れられている伝説の化け物に！

滑らかな竜の鱗にはじめて彼女の体温が触れたときの驚きをなんと

言い表わしたらいいか、竜が目を見張ったのは想像に容易いでしょう。

彼女が竜にもたれかかったまま寝てしまうと、竜は呆れ、いつも体を揺らし彼女を落としてしまおうかと悩みました。

もし竜が人の言葉がしゃべれたなら、すぐにでも彼女に『もっと危機感をもちなさい、そんなことではいつか危ない目に合ってしまう』とまるで親のように長々と説教したことでしょう。

けれど結局、いつだって竜は彼女を起こしてしまわないように、そっと息を潜め女に背を貸すのです。自分でもなぜそうするのか分からぬまま、ただ彼女の寝顔があまりにも幸せそうなので起こすのが忍びないのだと、そう結論づけるのでした。

女はたまに竜の体を小さな手で撫でます。

最初は子供が親を伺うように恐る恐る触れてきましたが、竜が何も咎めなかったので、味を占めたのが遠慮せずに触るようになりました。

あまりに嬉しそうに瞳を輝かせるので竜は好きにさせています。

彼女は気高き孤高の王を、ウサギかなにかと勘違いしてるのではないか。

竜は呆れ半分で思いながら、優しく鱗を撫でる手に喉を鳴らしました。

なんだか悪くない気分でした。

そんな心地になることに首をひねることも何度かありました。けれどその疑問を考えるたびに、どこかきまりが悪いような、落着かない気持ちになるのです。

なので竜は誰に咎められている訳でもないのに『きつと、暇すぎて情でも移ったのだ。そうだ、あまりに暇だったから。』と、自分に言い訳しては片目を開けて帰っていく彼女を見送りました。

やがて湖にも冬が来ました。

秋にはたくさんの実を籠に詰め湖を訪れていた彼女も、冬はさすがに堪えるようです。

コートを顔が埋もれるまで着こんで、暖かそうなショールでぐるぐる巻きになっけていても、小さなくしゃみをしていました。

その時彼は初めて気が付いたのです。

竜はそれほど寒さを感じません。しかし人にはこれは凍えるような寒さなのだ。人間の身体はとても脆いのです。思い立った事実には竜は愕然としました。

知ってました。知っていた筈でした。

知っているつもりな、ただだったのです。

竜は彼女に会うのをやめることにしました。

このままではあの子は病気になってしまいます。竜には伝える言葉を持たないので、そうするのが一番だと思いました。

そのまま消えるのは心配だったので、次の日竜は湖が見よく見える人の目には映らない崖の洞窟から彼女の様子をこっそり覗きました。

彼女は一日中そこで座り込み本を読んでいた。ときどき、何かを探しすように空や谷の方を眺めながら。

自分を探しているのだと、竜にはわかりました。

二日、三日たつにつれ、彼女が探すように空を見る回数が増えました。それと一緒に増える咳の回数に、固い鱗に覆われているはずの

竜の心臓はツキンと痛みました。

吹雪の吹いた四日目に、やっとあの子は湖まで来るのをやめました。

春になったらまたあの子に会えるだろうか。

吹雪に閉ざされた穴蔵の中で竜は考えました。

もう一度笑ってくれるだろうか、それとも怒っているだろうか。

もしかしたら二度と湖には来ないかもしれない。

そう考えるだけで、胸の奥が凍ったように痛みました。

湖の雪が解けるころ、竜は再び湖へ降り立ちました。

彼女は居ないのではないか、という不安は湖が見えた時に吹き飛びました。

はやる気持ちを抑え舞い降りると、あの子は大きな青い目を零れそうなぐらい見開いて次の瞬間とびっきりの笑顔を浮かべました。

何度も転びそうになりながら彼女は竜へ駆け寄って、翼を折り畳んだ竜に飛びついて。

竜は少し肝を冷やしましたが、彼女の顔を見るとグルグルと喉を鳴ならしました。

それから三度の春が巡りました。

冬は春を想いながら雪解けを待ち。

春になれば湖のそばでゆっくりと時間を楽しむ。

最初と同じように、時は流れます。

いいえ、ほんとは変わっていました。

あの子は少しずつ美しい大人の女性になり、竜の太陽の光で輝きの変わる瞳もますます深みを帯びました。

ある日、彼女は泣いていました。

いえ、泣いていたというのはいくらか語弊があるでしょう。空と同じ色の瞳に今にも零れ落ちそうなほど涙をためて、それでも微笑むのです。

「もう、会えないの」

彼女は竜の鼻先に淡い黄色の花で作った花冠^{かかん}をそっとかぶせました。それは若い人間の男女が春先に花束にして交換し合う、ふんわりとしたやわらかい花卉の花でした。

甘い香りに鼻をくすぐられ目を細めた竜に、彼女は愁い^{うれ}を帯びた瞳を伏せました。

そうして、小さく微笑みました。

「さようなら」

その顔を見た竜は動くことすらできませんでした。なぜそんな顔をするのか、問いかける声がありませんでした。

そうして彼女は湖に来なくなりました。

あの子最後の言葉の理由は、そのあとすぐにわかりました。

風や動物たちが、彼女と領主の結婚式が行われるという知らせを運んできたのです。

雷を身に受けたような衝撃に、竜の縦に裂けた瞳孔は糸のように細まりました。

結婚、結婚？

だったらなぜあの子はあんな顔をしたのでしょうか。竜だって知っています。結婚とは祝福されるものです。愛される人同士が結ばれる幸せな行事と聞きます。

彼女が望んだのなら、あんな悲しそうな目をするはずがありません。

竜は雄々しく翼を広げ穴倉から飛び出しました。胸に静かな決心を抱いて。

戸惑うことはありません。

竜はすべてに恐れられる生き物です。

ならば自分がなってしまうばいのです。

おとぎ話に登場するような、邪悪で凶悪な竜に。

姫をさらうおぞましい化け物に。

結婚式の当日、突如現れた影に広場は騒然となりました。

いきなり現れたおぞましい化け物に、平静を失い混乱に陥いる人々。ざわめき、泣き叫ぶ声、甲高い悲鳴。

その群衆の中で、ひとり啞然と化け物を見つめる美しい花嫁。

彼女を見つけて、竜は柔らかく目を細めました。

彼女は隣で腰を抜かして後ずさる親子ほどの年の差があるだろう男を押しつけ、竜に向かって駆け出そうとしています。

その様子を見て、慌てて竜は彼女の方へ飛びました。

危ないところです。彼女が自分から来てはいけないのです。

あくまでも恐ろしい竜にさらわれたのでなければいけないのです。

鋭い爪で傷つけないように、けれども決して落とさないように、力

加減に細心の注意を払って竜は彼女をやわらかくつかみます。

続々と兵たちが広場へかけつけてきました。

花婿が花嫁を取り返せと躍起になって叫んでいます。次々と飛んでくる矢から彼女を守るように身体につつみ、竜は近づいてくる兵たちに牽制の炎を噴きました。

矢は別に痛くありませんでした。竜のうろこに傷をつけれるのは鋼の武器だけです。

兵たちが炎を避けるときにできた、その一瞬の隙を使い、竜は勢いよく空へ駆け上がりました。

ざわめきと悲鳴が一段と高くなりました。

空中へ飛んでしまえばこっちのものです。人は追いかけることができません。

風を切り、竜はみるみるうちに町から遠ざかっていきました。

町や人里からだいぶ離れると、竜は彼女を背に乘せなおし空を飛ぶ速度を下げました。

乗り心地はあまりよくあいだろうに、彼女は背の上で微笑むばかりです。空色の瞳を瞬かせると、弾むような声で竜に尋ねました。

「わたしを助けに来てくれたの？」

竜は何も答えませんでした。

そんな彼に小さくはにかむと、彼女はうろこに覆われた頬に柔らかな手をそえました。

「ありがとう」

竜は答える代わりにちいさな手に頬を寄せました。

彼がグルリと喉を鳴らし目元を緩めると、彼女は花が咲くような笑みを浮かべました。

竜の住む洞窟につくと二人は一気に忙しくなりました。

人が住めるように洞窟を整え、人間の食べれる薬草や木の実をさがして、これからの生活に備えていくのです。

とはいっても、竜は彼女の指示通りに動くだけでしたが。荷物を運びこみながらちらりと覗き見た彼女の表情は、いままでみたことがないくらい生き生きとしていました。

一通り片付けが終わると、それからは二人で竜の採ってきた魚を焼いて食べたり、一緒に果実をつみにいたり。

竜はなにも食べなくても平気でしたが、彼女があまりに嬉しそうに竜を見るので、彼女の作った料理をもそもそと共に食べました。

そうそう、あの豪華な花嫁のドレスは上等な毛布代わりになりました。た。

彼女は一日中あれこれと働きまわり、竜の世話をしたりしました。そしてなにもすることがなくなると、かならず彼の隣へ寄り添いにきました。

静かで穏やかな日々でした。

竜にとっては幸せをかみしめるような日々でした。

あの子も同じ想いだったのかも知れません。洞窟に来てから彼女は以前のような曇りのない顔で笑うようになりました。

どうか同じ想いでいてほしい。

彼に抱きつき寝息をたてる愛し子を見つめ、竜は目蓋を閉じました。

しかし、楽しい時間は長く続きません。風が新たな噂を運んできま

した。

花嫁をさらった凶悪な竜。

その竜に怯える人々に、ついに王国が動き出したのです。
都で竜の討伐隊が編制され、討伐命令がだされました。

穏やかな風が吹く、春も終わりが近づいた日。

風が運んできた森の香りと、それに混じった人間と鋼の匂いに、竜はついにその時が来ましたのを知りました。

いつもと違う竜の様子に、女のほっそりとした手が心配そうに彼の喉元へふれます。

「どうしたの？」

安心させるようになでる手に、竜は気持ちよさそうに目を閉じました。

竜が彼女の手、首筋、そして頬にスンスンと鼻を寄せます。

彼女はくすぐったそうに笑い、それでもう一度心を込めて美しいうろこを撫でました。

しばらく静かな時が過ぎました。

やがて彼女の手が止まり彼の大きな首筋に抱き着くと、竜はゆっくりと目蓋を開きました。静かな決意を胸に秘め。

竜は女を担ぐと、宝物庫へつれてゆきました。

そこは、彼の大切なものを集めた部屋です。ここなら、万が一にも戦いに巻き込まれ彼女が傷つくことはありません。

背から彼女を下ろすと、竜は静かに向き直ります。

彼の凪いだ海のような穏やかなひとみに、女は胸騒ぎを覚えました。

「ねえ、どうしたの？」

竜は何も答えませんでした。ただあご上げ彼女に穴倉の奥へ行くように促します。そんな竜に、女は震える声で言いました。

「いやよ、置いていかないで。もしかしてわたし、悪いこととしてしまった？」

今にも泣きだしそうな声です。

竜は困ってしまいました。

別に彼女を一生ここへ閉じ込めるつもりじゃないのです。

ただ外が危ない間だけ、此処にいてほしいのです。

長い間、二つの視線が交差していました。

そしてしばらくたった頃。じつと諭すように見つめてくる瞳に、とうとう彼女が折れました。

「……きつと、すぐに迎えに来てね」

ゆっくりと、石の扉が閉まります。

竜は扉が閉じられてしまうまで、ずっと彼女を見ていました。

女を宝物庫へ非難させ、竜はほっと小さな息を吐きました。

比較的わかりやすいあそこなら、騎士たちは彼女の居場所に気付くでしょう。

岩の扉は彼女一人の細腕じゃ無理でも、鍛え上げられた騎士たちな

ら開けます。

風はたくさんの噂を竜のもとへ運んでいました。

王が今回の事件を事細かに調べられたこと、あの領主が咎められたこと、そしてあの子を無理やり花嫁にするのを禁じられたこと。

王は公平な方と聞きます。もう二度と彼女があゝの領主の花嫁させられる事はないでしょう。

彼女は無理やり領主に請われ、そして竜に攫われた哀れな花嫁。間違っても罰を受けることはありません。

静かに騎士を待ち受ける竜のもとに、ふいに鋼の矢が飛び込んできました。

息をつく間もなく次々と射られる矢に、竜が唸りとともに浅く刺さった矢を振り落とします。

その時でした。

竜のもとへ一斉に雄叫びを上げた騎士たちが傾れ込んできました。

囲まれ矢を放たれ、四方から切り付けられ身体に鋼の槍と弓が深々と突き刺さります。

炎の息吹きを吐こうとすると、素早く間合いを詰めた騎士が竜の喉元へ槍を突き出してきました。それを鋭い爪で振り払うと、竜は地に響くような咆哮をあげました。

「追い詰めるお！奴を空に逃がすなあ！」

うめく竜の前に一人の騎士とび出しました。

騎士の鎧の隙間からわずかに覗く瞳には、輝かんばかりの生気を宿っています。

騎士は素早く地を駆けると、竜の右目へ剣を突き刺しました。痛みに呻きながらも竜は、騎士の頭部へ爪を振り下ろしました。

騎士は紙一重で後ろへ跳び、爪を避けたようです。

カランと、騎士の頭部の鎧が弾け落ちました。

竜は目を見開きました。

鎧の下に隠されていた、騎士の精悍な顔が外気へさらされました。

その顔に受けた竜の血をそのままに、青年が竜へ挑むように視線を向けています。

鎧を壊されてもなお、彼の瞳には力が宿っていました。

化け物を倒す伝説の騎士に、これほど相応しい男もいないでしょう。

竜が目を見開いたのは、ほんの一瞬でした。

そのわずかな隙に、騎士たちは次々と竜へ斬りかかります。

それを強引にふり払い、竜は無我夢中に後ずさりました。

気がつけば、あと一歩で崖というところまで来ていました。

騎士が最後の一太刀を、竜の胸に斬りつけました。

刃を受けた竜はバランスを崩し、崖から落ちていきます。

終わったのだ。竜は思いました。

これで、ぜんぶ終わったのだ。

そのとき、谷底へ崩れ落ちていく竜の耳に、絹を裂くような悲鳴が聞こえました。片目を上へ向けると、宝物庫にいるはずのあの子が、

絶望に凍り付いた表情で竜をみていました。

竜は自分の姿を確かめました。
いまや彼女が愛した自慢の鱗も翼も、槍や矢が突き刺さりボロボロでした。彼女と視線を交わし会った瞳も、片目が無残に潰れていきます。

そうする間にも竜の鈍虹色に輝く鱗は剥がれ落ち、七色に輝きながら谷底へ落ちていきました。

竜は渾身の力を振り絞り、翼を広げました。
付け根からもげてしまいそうな痛みをねじ伏せ、唸りを噛み殺し、穴だらけの翼で風を受けます。

ここで死んではいけない。

強い想いが竜を動かしました。

どこでもいい、あの子から見えないところに。
風に乗り、彼の身体は空へ舞い上がりました。谷をぬけ、山を越え、いくつもの町をすぎ。

翼が風を受け止められなくなり、竜は地面に叩きつけられました。
霞む片目で見た光景に、竜はふと穏やかな吐息をもらいました。
力尽きて落ちた場所は、どこかあの湖に似ていたからです。

あとひとつ、ひとつだけ、やらなくてはならない事があります。
最後の力を振り絞って立ち上がると、竜は大地を揺らすような咆哮を上げました。

ながくながく、息の続くかぎり。喉が裂けんばかりに痛んでも。

いなきは山々にこだまし、この国を駆け巡ります。谷をぬけ、町を通り、山を風のように駆け、あの子の場所まで。

あまくやわらかい、いつかの花の香りが鼻孔をくすぐりました。足元にこぼれた薄黄色の花弁が風に揺れています。

空を見上げるように首をもたげ、竜は浅く息を吸いこみました。

そして、ゆっくりと動きを止めました。

それっきりでした。

まだ伝説の生きものが生きていた時代、人を愛した馬鹿な竜の一生です。

月になった獣

ある夏の夜のことでした。

追っ手から一匹の獣と少女が隠れておりました。

きらきら輝く月の光が、ひとすじ二人を照らしておりました。

少女の好きだった、獣の銀色に輝く毛皮は、無惨にも血と土で汚れ今は見る影もありません。

それでも凜とした瞳だけは変わらずに少女を見ていました。

「お逃げなさい」

獣はいいました。

少女は獣にしがみつき、頭を獣に押しつけると何度も首を横振りします。

「一人はいやだ」

少女には戻るところなんてありませんでした。いつだって帰る場所は獣のそばだけでした。

親に捨てられ、兄弟に見捨てられ、獣まで少女をすてるのでしょうか。

詰めよる少女に獣は困ったように鳴きました。

「もう、おゆき。急がないのならお前なんか食べてしまおうよ」

「食べればいい」

少女は腕にこめた力を少しだけ強くしました。

「いきたくない」

声は震えて、目の奥がつんと痛みます。

獣は少しだけ悲しさを滲ませた声で、静かに言いました

「いいね、川に沿っておゆきなさい。そしたら私の知り合いがいる村へ行けるから。」

そして、私を助けに来ておくれ。あいつらに見つからないように、急ぐんだよ」

それは、やさしい言葉でした。でも有無を言わせない強い響きです。もうこれでお別れなのだ、そう悟るには十分なだけの。

少女はいよいよ悲しくなって、我慢していた涙が一つこぼれました。

獣は涙をなめとると、ちいさく微笑みます。

「いきなさい」

少女は走りました。走って、走って、走って足は草や石で傷だらけになりました。体もかすり傷でいっぱいです。

それでも決して止まらず走り続けました。

だって、獣のやさしい嘘だとわかっていたのです。

いくら獣でも、あんなところに一人残されたら助かりません。
止めようと目元を乱暴に拭いても、次から次へと涙はこぼれてきます。

嗚咽だけは漏らさないように、走って、走って、走って。

そうして、一つの小さな村にたどりつきました。

空は白み、薄明るくなっていました。

ある村に、獣に育てられた少女がいました。

ながい長い月日が経ち少女は大人になって、家族もできて、いつしか老婆になりました。

老婆が天に召された夜。

その夜は不思議なほど、月が青白く光り輝いていました。

漆黒の夜空にぽつんと、まるで獣の爪のような銀色の月が。

そしてもっと不思議なことにその日夜空を見上げた者は皆一様に、ひとつの小さな小さな星が月に向かって流れてゆくと言うのです。

空の端に落ちていくのではなく、月に向かって駆けるように。

みんなが寝静まった静かな頃。

小さな星はくると宙返りをして、銀色の獣になりました。

そして月を追いかけるように、空の向こうへ消えてゆきました。

遠い昔のお話です。

「騎士とかわいそうな娘」(ある国に伝わる伝説より)

むかしむかし、黄金色に輝く谷にひとりの少女が住んでいました。少女にはお父さんも、お母さんもいませんでした。

けれども少女はとても優しい性根だったので、動物たちに好かれていました。

少女は、毎日湖に通い、動物たちとお話しました。

動物たちだけが、少女の心の支えだったのです。

何年かたち、やがて少女は美しい娘へ成長しました。

ある日、湖から帰る途中の娘を領主さまを見つけました。

「あの娘はだれだ？」

領主さまがたずねました。

「この近くに住む、みなしごの娘です」

従者は答えました。

娘はとても美しかったので、領主さまは一目で娘が欲しくなっていました。

不幸なことに領主さまは悪い人でした。嫌がる娘を無理やり花嫁に迎えようとしたのです。

しかしその企みは叶いませんでした。

結婚式の日、突然あらわれた醜い竜に娘は攫われてしまいました。

領主さまはかんかんになって怒りました。

兵士は娘を助けようとしましたが、どうにもできませんでした。だって竜はとても恐ろしい生きものだからです。

そんな中、ひとりの騎士が、立ち上がりました。

「私が竜を倒して、娘をたすけよう」

鋼の剣を片手に、騎士は洞窟に乗り込みました。

騎士は竜と死闘を繰り広げました。

騎士は最後に風のような一太刀を放ち、竜に止めを刺しました。

そのとき竜の傷口から流れた血が、騎士の右目のなかに入りました。

みるみるうちに騎士の瞳孔は縦に裂け、瞳は不思議な色合いに変わりました。

そのときから騎士は竜と同じ右目を持つようになったのです。

悪い竜を倒した騎士は閉じ込められていた娘を捜し出しました。

騎士も美しい娘に、一目で恋に落ちました。

「私と結婚式してください」

騎士は求婚の黄色い花を、娘にささげました。

娘は何も答えませんでした。

「あなたが怯えるなら、私のおぞましい化け物右目もくりぬきましよう」

娘は答えました

「いいえ。たとえどんな姿になろうとも、わたしはあなたを愛しています」

永遠の愛を誓い。

ふたりは、お城へ戻りました。

そして娘と騎士は幸せに暮らしましたとき。

＊注釈

この国には現在でもしばしば、片方の目の瞳孔が縦に裂けた人々が存在する。

そのため人々のあいだで根強く、彼らが娘と騎士の子孫ではないかという説が信じられ、竜の民と呼ばれている。

ふしぎな花束

「たいへんだ！人が倒れてる」

朝のとっても早い時間、空が白み、ニワトリが鳴きはじめたところ。大きな欠伸をする『きいろいの』のもとへ、仲間の妖精のひとりを取り乱して駆け込んできました。

「：なんだって？どうしたんだいそんなに慌てて」

「だから子供がたおれてるのさ！はやく来て！」

「ちよっと待ってよ！」

『あおいの』に連れられ、急いで村の入り口の近くへ来ると、ボロくずのようになった人間が倒れていました。

「ひどい…」

『きいろいの』と『あおいの』は息をのみました。

目を背けたくなるようなそれは、ちいさな女の子のようでした。

服もどこもかしこもボロボロで、手足は痛そうな擦り傷だらけです。

「どうしよう！このままじゃ死んでしまう」

「メリーおばさんと呼ばう！」

メリーおばさんは親切な女の人です。

村の入り口の近くに住んでいて、旦那さんがこの村にひとりっきりの医者様なので、きつと助けてくれるでしょう。

ふたりはニワトリの声真似をして大声で騒ぎ立てました。

しばらくすると、異常に気付いたのかメリーおばさんがニワトリの

様子を見に、外へ出てきました。

ニワトリの背に隠れたふたりが、女の子のところまでニワトリを連れて行きます。

ニワトリを追いかけてきたお婆さんが、女の子に気づきました。

小さく息をのむと、お婆さんはニワトリをそのままに家の中へ駆け込みました。

「大変だ！あんた、起きとくれ！患者だよ！」

お婆さんの旦那の腕が良かったのでしよう、女の子は二日間寝込んだ後、目を覚ましました。

助かった女の子は、ひどく怯えているようでした。

しばらくして起き上れるようになった女の子に、お婆さんは優しく聞きました。

「どこから来たんだい？」

女の子はうつむいたまま黙っていました。

「帰る場所はあるのかい？」

「……………なくなっちゃたの」

女の子はポツリと言いました。ちいさな小さな声でした。

「そうかい、つらかったね。……安心をし、今日からあんたはうちの子だ」

お婆さんが女の子の頭を撫でました。

旦那さんもそれを優しく見守っています。

しばらくして、ちいさなしゃっくりが聞こえました。
ひっく、ひっくと泣く女の子を、おばさんが抱きしめます。

妖精たちは、その光景をずっと窓の陰から見ていました。

女の子は、やがて村に溶け込んでいきました。

最初は引っ込み思案だった子供も、メリーおばさんの子供になった少女の兄妹や他の子供たちと話すうちに慣れ、村の子供たちにまじって遊ぶようになりました。仲良しな少年もできました。

『あおいの』は木の上から、その様子をよく見ているようでした。

「きょうはなにを見てるの？」

『きいろいの』が不思議そうに聞きました。

「あの子がお使いをしているんだよ」

『あおいの』は女の子から目を離さず答えました。

「ああ、ちがう！隣の店だ」

見れば女の子は、おつかいにパンをかうようでした。

しかし、隣のチーズ屋さんに今にも入って行きそうです。

心配でこっそりついてきたメリーおばさんの他の兄妹や少女と仲良しな少年も、後ろからヤキモキして見守っています。

大きな木の上では、それが全部見えました。

女の子は少し迷った後、近くのおじさんに話しかけ、きちんとパン屋さんに入って行きました

「よかった！」

少年や女の子の兄妹と一緒に『あおいの』もホッとしたようでした。ほう、と安心の息を吐く『あおいの』に、『きいろいの』は尋ねました。

「きみは毎日あの子を見ているね。そんなに心配なのかい？」

『あおいの』は少し考え答えました。

「……ちよつとちがうかもしれない。あの子を見ているのがすきな
のさ」

「そんなに好きなら一回ぐらい話しかければいいのに」

「いいんだよ」

『あおいの』は静かに笑って答えました。

『あおいの』はそれから女の子を見守っていました。

たまに見つからないように、小さな手助けをしているようでした。

やがて女の子は成長しました。

そしてとても美しく、明るい娘になりました。

引く手あまたの娘はいくつかの求婚を断り、そして仲良しの少年……いえ、今はたくましい青年になりました。

かつて少年だった青年にプロポーズされ結婚することになりました。そのうわさを聞いて『きいろいの』は『あおいの』の様子を見にいきました。

『あおいの』は妖精たちにとっては大きな封筒を見していました。

『きいろいの』は尋ねました。

「それ、どうしたの？」

「あの子からさ」

『あおいの』は小さく苦笑しました。

そして封筒に書かれていた文字に、とてもとても大切なものを見るようなあったかい眼差しを向けました。

『あおいの』のちいさな小さな手は何度も紙面をなでます。

「気づかれていたみたいだ」

『ちいさなともだちへ』と書かれたそれには結婚式の招待状が入っていました。

「会なくてよかったのかい？」

「いいんだよ」

『あおいの』は、昔と同じように答えました。

けれどもそのあと少しだけ間を置いて、『あおいの』はもういちど口を開きました。

「ちゃんと、彼女と友達になれていたんだね」

少し照れくさそうにはにかんで、笑ってこたえる妖精は幸せそうでした。

結婚式の日、広場で祝福を浴びるふたりを妖精たちはやさしく眺め

ていました。

屋根の上に乗った『あおいの』と『きいろいの』は、閉じていた
いさな手をそうっと開きます。

妖精の手の平からは、たくさんの淡く光る花びらが零れ落ちてゆ
きました。

それは小さなプレゼント。妖精からの贈り物。

人々の上に、風に乗った祝福の花びらが降り注ぎました。

それはそれは不思議な光景でした。

その花びらは地面に落ちると、フワリと光って消えるのです。
村の人たちは、喜びの声を上げました。

「きれいだね」

「うん、きれいだね」

あの子は黄色い花の冠を頭にのせ、人々の真ん中で花婿とダンスを
踊っています。

にぎやかな音楽に、楽しそうな人々。

小さなふたりのお客さまは、それをいつまでも、いつまでも眺めて
いました。

約束の一輪

「私の一生分の詩を君に捧げよう、ああだから、どうか愛している
といっておくれ」

それは青年のプロポーズの言葉だった。

彼はさすらう吟遊詩人。彼女は代々その土地に根付く農夫の娘。

遊民である彼は、病弱で村の外に出れない彼女のために、年に数度
村へ訪れては世界中の物語を伝え唄った。

青い一輪の花とともに彼が運んでくるのは、遠い地で起こった出来
事や、騎士たちの物語。

それが習慣となり、二人が出会ったいつかの季節から七年の月日が
流れた。

……その日村に訪れた詩人が彼女に捧げたのは、鮮やかな青の花で
はなく淡い黄色の花束。

ともに送られた、吟遊詩人がいうにはあまりに陳腐な台詞。

緊張のためか少し震える声で継がれたそれに、されど青年の愛しい
人は綻ぶような笑みで答えた。

町から町へ、国から国へ。

世界中を旅し、決してとどまる所を持たなかった彼が初めて永住の
地を得た瞬間だった。

男は楽器を捨て、農具を手にとった。豎琴を奏でる指は土を耕すた
めに。

かつて唄を紡いで出来た指先の肉刺は、鋤に持ち替えられ掌中に広
がった。

それでも毎日欠かすことなく妻へ捧げられる詩だけが、彼が詩人でありし日の僅かな名残。

たとえば子は望めなくとも二人は幸せだった。

厳しくも暖かい日々はそれから駈けるように過ぎ、老人になった青年はいま、シワの刻まれた愛しい妻の手を握っている。

「詩をちょうだい。……そうね、愛の唄がいいわ」

ベットに横たわる老婆は眦まなじりを緩めると、静かに彼女を見つめる夫の頬に指を寄せた。

少し擦れた声で告げられたそれは、長年連れ添った日々の中一日とて忘れられることなく行われてきた約束。力なく頬に添えられた妻の手を、節くれだった両手が包み込む。

老人のしわがれ声で紡がれた詩は、震えを押し殺すように僅かわずにくぐもっていた。

それは感謝の唄だった。旅立ちの歌だった。そして哀願の詩でもあった。

「……貴女が私の前から消えてしまうのが、今はただ恐ろしい」

その言葉を最後に締めくくられた詩を、静かに彼女は聞いていた。いまわの際きわを前に、彼女の瞳は不思議なほど透き通り、凧いだ湖の水面を思わせた。

「……あなたに、ずっと返したかったものがあるの」

すべてが終わったら、古い戸棚の中の包みを開けてほしい。

そう懇願すると彼女は穏やかに目を眇めた。

夫の目元をぬぐう指先は、いつもと同じよう慈しみにあふれている。彼の頬に水の粒はない。それでも彼女は彼の頬をぬぐい続けた。

「覚えていて愛しいあなた、私はずっと傍にいるわ」

そして、それが彼の聞いた彼女の最後の言葉だった。

心残りには、彼女の残した言葉だけだった。

すべてが終わった後。老人は戸棚の奥に、柔らかな布にくるまれたそれを見つけた。

包みを開け、大切に仕舞われていたそれを彼は震える腕に抱く。

そして声を詰まらせ、崩れ落ちるように座り込んだ。

飴色の光沢を放つ美しい楽器は、いつかの昔、彼が捨てたはずの豎琴。

何十年も相見えることのなかった、片割れ。

なのに、それは当時のまま、色あせることなく。

今にも音を奏でだしそうな豎琴は、彼女がいとしみ手入れしてきたのであろうと直ぐにでもわかった。

だだっ広い部屋の中で、老人は一人 肩を震わせた。

——『ねえ、今日はどんな詩を唄ってくれるの？』

老人は鞆に僅かばかりの食糧を詰めると、コートを羽織り、昔に比

べて随分と重くなった足取りで戸口へ向かう。

孤独な旅の連れはかつての相棒、古い豎琴。

もう戻ることのないだろう部屋の中を、わずかに目を細め眺めると彼はドアを開いた。

扉の先に見える空はかつて旅をしていた時よりも遠く、いつも見ていたはずの青と太陽が鮮やかに色付きで迫ってくる。

その濃密な色は、いささか老人には眩しすぎるほどだった。

家の傍の彼女の眠る石碑の周りには、寄り添うようにたくさんの花々が植えられている。

その石肌に彼女の頬を包むときのように触れ、老人はそのあふれるほどの花の中でひっそりと群生する、青い花に目を向けた。

——ふいにかつての彼女の姿が鮮明によみがえってくる。

彼女はあの花をいつだって宝物のように喜んだ。

いまになって迫りくる喪失の実感に老人は霞む目蓋を閉じた。

彼が再び目を開けたとき、そこにはもう空を写し取ったような鮮やかな青が風に揺れているだけだった。

「……いつてくるよ」

コートを翻し、老人は足を踏みだした。

——さあいざゆかん、

最後の旅路へ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0814w/>

とある竜の一生

2011年11月12日09時35分発行